

第8回 テーマ：「1月、永遠の今—恵みの時を生きる」

コリントの信徒への手紙二/06章 02節

なぜなら、／「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた」と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。

① 人生の時間

1月は和暦で睦月(むつき)だが、これは親戚や知人が集まって仲睦まじくする月だといい、一休さんの歌「正月や 冥土のたびの一里塚 めでたくもあり めでなくもなし」。時間の経過と共に人生の終着点に向かっていく。一月・Januaryはローマ神話の神ヤヌス(Janus)からきている。ヤヌスは前後2つの顔を持ち、始まりと終わり、入り口と出口などを司る門の神。1月を守護する神ヤヌスが英 January の由来・語源。1月・2月・3月の頭文字を取って「行く」「逃げる」「去る」と表現することがある。

② 過去・現在・未来の区分のなかで

新しい気持ちで歩み出そうとした志もいつしか日常生活の慌ただしさの中に埋没していく。私たちは過去、現在、未来という時間の流れの中に生きている。そこにある神秘的なものを感じる。過去はもはや存在しないものであり、また未来はまだ存在していない。そして現在とは、過去と未来の間であって、常に移動している境界線のようなものだ。

かつて旧約の詩人はこう歌った「人生の年月は七十年程のもので、健やかな人が八十年を数えても／得るところは労苦と災いにすぎません。瞬く間に時は過ぎ、わたしたちは飛び去ります」

(詩編 90・10)。

「何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。…3:11 神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。」(コヘレト 3・1、11)

③ 未来を思い描きかつ過去を振り返る

パウル・ティリッヒ(1886-1965)は、1963年「永遠の今」(The Eternal Now)でこう書いた。「個々の人間の生活において、過去をめぐる戦いは続いています。…私たちは過去の中に祝福よりも、呪いを見る傾向にあります。いかなる医学的療法もこの苦痛に決着をつけることはできません。なぜなら、いかなる医療も過去を変えることができないからです。私たちは変えることのできない過去に向かい合わざるを得ないが、その際、ティリッヒはどう過去を振り返るのか、その視点が問題になるといっている。

④ 今や、恵みの時

コリントの信徒への手紙6章2節「なぜなら、／『恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。救いの日に、わたしはあなたを助けた』と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日」。これは直前の1節、「わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。」を受ける。神様からお恵みをいただいたので、それにふさわしい生き方をしようという勧め。

パウロはイザヤ書 49章 8節「わたしは恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた」を引用。「バビロン捕囚からの解放」という歴史的な出来事(紀元前 539年)を経験した預言者は神様の恵み深い歴史への介入について語った。使徒パウロは今、第二イザヤの預言がすでに成就しているという視点から、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」と語る。

⑤ 日本語の「時」の理解—大野晋説

時(トキ)という日本語は、紐トク、衣をトキ、洗うと同じで、ものが溶け、くずれ流動していくものの意味だと説明。「われわれの祖先は、ものがゆるみ流動していくこととして、「時」を直感したのではなからうか」というのが大野説。鴨長明の「方丈記」の冒頭「行く川のながれは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。」日本人の「時」理解・時間感覚は、どこ

か方丈記の「水の流れ」のようなものではないか。だがこのような理解が日本独特のものかという点、必ずしもそうではない。

⑥ ギリシア語の時間・「クロノス」

時間を言い表すギリシア語の一つ「クロノス」は、英語の時計「オクロック」、年表の「クロノロジー」といったことばの元の言葉。この「クロノス」の語源をさらに遡ると、ギリシア神話のクロノスという王の名前である。このクロノス王は、自分の王位が息子たちに奪われるのを恐れて、彼等を次々に飲み込んでいった。古代ギリシア人が、そういうクロノス王の名を語源として「時間」を言い表そうとしたことは、大変興味深い。つまり、時と言うものが、すべてのものを次々と飲み込んでいくものとして理解された。

⑦ あなた方は時を知っている

ローマの信徒への手紙 13 章。「更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです」(ローマ 13・11)。パウロにとって時間とは、もはや全てが流れ去ってしまう空しい時ではなかった。なぜなら「今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。夜は更け、日は近付いた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に付けましょう」。

キリスト者とは、時を知っている。それは、全てが流れ去ってしまう空しい時のことではなくて、主イエス・キリストの到来によって始まった新しい時、恵みと救いの時なのだ。パウロはこう宣言している。ですから、時間とはもはや始まりと終りのない無限に続くある目標のない流れではなく、そこで神様が働く特別な時。

⑧ 「カイロス」という神の時

パウロが「あなたがたは時を知っている」という場合、「カイロス」ということばを用いている。「カイロス」とは、神様が定められた特別の時、与えられた恵の時を意味する。キリスト者もそうでない人も同じ普通の時、人間の時の中に生きている。しかし、キリスト者は神の時を知るものとして、今ここで、新しく始めることができる。

ティリッヒは、現代人は永遠なるものの次元を失ってしまったがゆえに、「現在」を受け入れる勇気に欠けると指摘。過去、現在、そして未来という時の様式にはそれぞれ固有の神秘があり、また固有の不安を伴うという。しかし、ひとは「永遠の今」の存在に気付くとき、現在に安らぎを見出すことができるとして結論をこう述べる。「すべてを消耗し尽くす時の力に勝る力は、ただひとつ、永遠なるものです。すなわち、昔いまし、今いまし、やがて来るべき方であり、初めであり終わりである方なのです。この方が、過ぎ去ったものについて、私たちにゆるしを与えてくださいます。来るべきものに対しては、勇気を与えてくださいます。そして、その永遠の存在のなかにある安らぎを、私たちに与えてくださるのです」

⑨ 主の恵みの年を生きる

神様は時のなかに、歴史の中にその独り子を生れさせ給うた。その誕生の時、すなわちカイロスの時が、私たちの歴史の中心となっている。「アノ・ドミニ」ANNO DOMINI という「主の年」を意味するラテン語を目にする。西暦 2022 年は、単に自然と人の時ではなく、ずっとキリストの誕生の時、カイロスの時を重ねている。なにかのつべらぼうな、すべてを押し流すような流れの中にあるのではない。イエス・キリストによって始まった新しい時、恵みと救いの時を生きている。

⑩ 時間の理解と存在の意味

自分が年を重ねていくことがどういうことなのか、あるいはいまこうして信仰を与えられていると言う事を考える場合にも、やはり時間の理解ということは大きな意味をもつ。神様の救いのときであるカイロスは礼拝や教会の暦の基礎となっている。人のときであるクロノスの中にありながら、神の時カイロスにあずかって思いを新たに、感謝と賛美を捧げるときが与えられている。私たちはパウロの言うように、人の時の中に神様の時を見分けるものとして、生かされている存在。2022 年が始まり新たな時を刻み始めたが、この年が主の年であることを覚え、喜びと感謝をもって恵の年を生きて行きたい。